
プレゼント - 月下草シリーズ02 -

秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレゼント - 月下草シリーズ02 -

【著者名】

Z6357C

【作者名】

秀

【あらすじ】

「Mooner-Bar」での一組の恋愛。『プレゼント』で
思い出されるのはどんな記憶？

「はい」

「何?」

「プレゼント」

「…ありがとう。開けていい?」

ガサガサ

「…ブレスレット?」

「おまえ、好きだろ? そういうの。いつも見てたし」

「…ありがとう」

「…」

「つけてみるね」

ガサガサ

「ねえ、腕時計を贈るのって『あなたを私に束縛しておきたい』って意味なんだってね?」

「あー…何かそんなこと言うなー」

「だったらブレスレットはなんなんだろ?」

「…まあ?」

カチヤカチヤ

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…?」

「…ねえ」

「ん?」

「…つけて？」

「…なんで」

「…できない」

「…なんで右につけようとするんだよ。左にしろ。左に」

「…だつて左は時計つけてるもん」

「…」

「それにこの金具、どうやって右手一本でつけたりしてのよ」

「…オレが知るか」

「ね？」

「…」

「…」

「ありがと」

につこう

無言

* * * * *

「…ねえ、マスター、あれつて許されるわけ？」

「…いいんじゃないですか、微笑ましくって。青春ですねえ」

「つてゆーか、さあ。今時小学生でももうちょっと気の利いた会話しない?いいの?あれで」

「…いいんじゃないですか。恋愛つてそういうつものでしょ。ね

？」

カフェバー「Moonee's Bar」は、昼間はカフェとして営業している。半地下構造の店は田立つものではなかったが、そこで出されるコーヒー や紅茶は絶品で、ロコモで知る人ぞ知る名店として一部では人気を博していた。

それでも大抵は常連客が数人入る程度で、新規の客が入ることはなかなかないことなのであった。

しかしその日はカウンターの常連客の他に、初見の客がテーブル席に入っていた。二十代前半と思われるカップルで、コーヒーとケーキの載ったテーブルをはさんで何やら話している。当人同士は静かに話しているのだが、どうにも珍しい光景であるため、見るともなし聞くともなしにその様子は周囲に伝わってしまっているのである。

カウンターでそつとマスターに囁いているのはグレーのタートルネックのセーターにパンツスーツの女性。一見普通のOLスタイルであるが、雰囲気は随分とラフで自由なものであった。小さなポーチ以外に荷物のないところから、どうやら近所から昼食を摂りに来ているもののようである。

「ほら、サイさんはどうなんですか？」

「…どうして？」

「恋人に贈り物つてしたことあるでしょ？」

「……忘れたわねー、そんな昔のこと」

「……サイさん、何歳なんですか」

マスターに『サイさん』と呼ばれた女性はわざとらしく視線を浮かせて逸らせた。そんなとぼけた仕草にマスターが苦笑する。

「 そうねー……時計、ねえ…」

視線は宙空に向けたまま、ポツリと彼女が呟く。

「腕時計じゃないけど、時計を贈ったことはあるわね」

人に聞かせる意思があるのかないのか判然としない口調に、マスターはつい意識を向けてしまう。そんなマスターの視線に宙で動かされた彼女の視線がぶつかる。思わず催促するような態度をとってしまったことにマスターは動搖して、慌てて視線を逸らせる。そんなマスターの様子に、彼女がくすりと笑みを漏らした。

「田覚え時計だつたかな。欲しこつて言つてたのよね。その人が」
そつして続けられた彼女の台詞は、おそらくマスターに気を遣わせ
ないための、彼女の思いやりであつたろう。その口調は悪戯っぽい
笑みを含んだものであつた。

「だから買つてあげたの。デートのときにね。どれがいい?つて」

彼女がそんな風に自分のことを話すことは珍しかつた。彼女はこの店の常連で、付き合いもけつこう長いものになる。その間たくさんのこと話をしたり訊いたりしてきた。

彼女は外見とは裏腹になかなか面白い性格の持ち主で、個性的な客の多いこの店の常連客の中でもその存在感は随一である。しかし彼女は基本的に無口なタイプで、自分のことについては多くを語ろうとはしなかつた。彼女は決して他人との会話が嫌いなわけではない。むしろ好きなタイプだらう、とマスターは思う。彼女の語る言葉は魅力的であつたし、その声もとても耳に心地いい。何人かの常連客が集まると始まる他愛ない会話でも、彼女はいつも楽しそうに参加している。しかし自分のことについて訊かれると、さりげなくかわしてしまうのが、彼女という人物であつた。

どうやら可愛らしい恋人同士の会話が店内をほのぼのとしたムードに染めてしまつたようだな、とマスターは思つた。

「那人?…けつこう、そのすぐ後に別れたかな…」

彼女が小さく肩を竦めた。

「つていうか、…うん、それを贈つた頃、もう既にかなり危機だつたんだよね」

「なのに何で贈り物したんですか?」

そう問うと彼女は頬杖を突きながらカウンターの表面に視線を落とした。

「…悔しかつたのも。…私つてかなりプライド高いからさ、他の人と比べられるのつて我慢ならないのよね。…多分その人はそん

なこと気付いてなかつたんでしょうけど。ちょっとした会話で、なんかちよつとずつストレスが溜まつてたような気がする。…もちろんその人は私がそんなことでイラついてるなんて気がついてなかつたでしょうね…ううん、普通は多分気が付かないよね

半分独り言のように彼女は呟く。焦点の合わない視線がカウンターの木目をなぞる。

「言えばよかつたのに。そうしたら解決できる」とだつたんじやないですか？」

「そうかもね」

彼女が顔を上げた。そしてにっこりと笑つてみせた。

その人に時計を贈つた。

『朝起きれないんだよー旦覚まし壊れちゃつてさあ

そんなことを言つて笑つてるから、

『じゃあ、買いにいこつか？』

そう言つたらなんだかとても嬉しそうだつた。

誕生日だつたか。クリスマスだつたか。覚えてないのはやつぱり多少の罪悪感のせいだらうか。

時計を贈つたデーターの、その一週間ほど後には関係は終わつていた。

『何で時計なんて贈つたの？』

『だつて、悔しいじゃない』

『だつてそしたらその人は一生忘れないでしょ？

その時計を見るたび、時を刻むたび、時刻を報せるたび、それを贈つたあたしのことを忘れることができない。

ずっとあたしのことを考へることになるでしょ？

その人にとってあたしが一番の存在になるでしょ？』

『誰かとあたしを比べてるなんて悔しかつたのよ
『違つたかもしれないのに?』

『それでもあたしは一番じやなきや嫌だつたのよ』

「女つて怖いのよ、マスター」

勘定を払つて出て行く間際、肩越しに振り返つた彼女が悪戯っぽい笑みで瞳を細めた。マスターはぱみぱみと瞬きをしていたが、そのままドアベルを鳴らして出て行く彼女の後姿に、慌てて声をかけた。

「またびりだー!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6357c/>

プレゼント - 月下草シリーズ02 -

2010年10月8日15時48分発行